

AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会 会報 第59号

空中回廊

コレクション展紹介：第3期コレクション展「19-20世紀のフランス美術」より
キュビズムとアール・デコのつながり

会員のひろば：はじまりから見えること（後編）
～豊田市博物館 村田真宏館長へのインタビューから～

収蔵庫から：入江波光 《南欧小景》

友の会から：新会長挨拶



特集「19-20世紀のフランス美術」より

キュビズムとアール・デコのつながり

2025年度第3期のコレクション展ではフランス美術を特集します。この時期はちょうど「ゴッホ展 家族がつないだ画家の夢」の開催期間であることにちなみ、ゴーギャンからスタートで、ナビ派、フォーヴィスム、エコール・ド・パリ、キュビズム、アール・デコ、シュルレアリスムと続き、最後にどの芸術運動にも属さず独自の芸術を追求した画家たちの作品を紹介します。これらのトピックの中でも、アール・デコについては当館ではあまり取り上げられてきませんでした。そこでこのページでは、当館の所蔵作品と関連させながらキュビズムからアール・デコに至る芸術の流れについて書いてみたいと思います。

1907年、パブロ・ピカソのアトリエを初訪問したジョルジュ・ブラックは、翌年の冬頃から頻繁にお互いの作品を見せ合って議論を交わしながら、新たな絵画、つまり対象を幾何学的に分解して画面上で再構成するキュビズムの探求を推し進めます。このブラックのアトリエ訪問に同行した人物が、当時のフランス美術界において重要な人物であったギョーム・アポリネールでした。詩人で作家の彼は、ピカソが「洗濯船（バトー・ラヴォワール）」と呼ばれるモンマルトルの集合アトリエで生活を始めた1904年にはすでにこの画家と知り合い、親しく交流していました。また1913年に出版した『キュビズムの画家たち：美的省察』という書籍でアポリネールはこの二人を含むキュビズム画家たちを取り上げながら彼自身の芸術理論を展開し、美術評論家として名を上げました。さらに、のちのシュルレアリストたちとも交流を持ち、1917年に上演されたバレエ・リュスの『パラード』でプログラム文を担当し、ここで初

めて「シュル・レアリスム」の語を使用しました。この語は1924年にアンドレ・ブルトンが発表する「シュルレアリスム宣言」に引き継がれました。

当館はルイ・マルクーシの《アポリネールの肖像》という版画作品を所蔵していますが、そこには第一次世界大戦での従軍の際の頭部への被弾を示唆する包帯や、文筆活動を示す複数の文字が描き込まれています。



(図1) ルイ・マルクーシ
《ギョーム・アポリネールの肖像》1912-20年、
エッチング・アクアチント・ドライポイント、紙

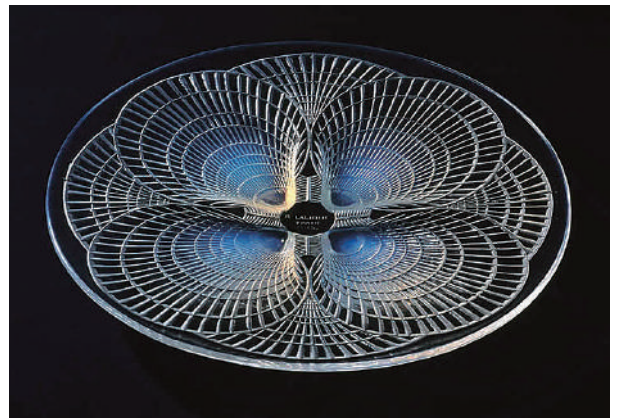
キュビズムの創始者ピカソとブラックが主に活動の場を画廊としたのに対し、サロンなどの展覧会を主な活動としたキュビストたちは「サロン・キュビスト」と呼ばれ、それまではわずかな収集家のみしか察知していなかったキュビズムの運動を広くサロンという場で展開しました。代表的な芸術家にはフェルナン・レジェ、ファン・グリス、ロベールとソニアのドロワー夫妻、レイモン・デュシャン=ヴィヨン、そして最近では贗作騒



(図2) フェルナン・レジェ
《緑の背景のコンポジション（葉のあるコンポジション）》
1931年、油彩、画布

動で有名になってしまったジャン・メッツアンジェらがあり、比較的鮮やかな色彩を用いてプリズム的な画面を構成しました。また彼らは、キュビズムとアール・デコを繋ぐ重要な存在でもあります。というのも、サロン・キュビストのうちの何人かが1912年のサロン・ドートンヌでのアンドレ・マールを中心とする「メゾン・キュビスト」の展示にも参加し、そこで彼らの絵画が壁面に飾られただけでなく、建築や室内装飾に直線や幾何学的な形態を取り入れたのです。例えばデュシャン=ヴィヨンはメゾン・キュビストの建物のファサードを、ロジェ・ド・ラ・フレネイは暖炉を、単純で明解な直線でデザインしました。必ずしも建物全体がそのようなデザインで覆われていたわけではありませんが、部分的に取り入れられた直線やシンメトリーを多用した幾何学的な意匠は、のちのアール・デコと共通する部分が多くあります。

アール・デコはそもそも、19世紀末に流行したアール・ヌーヴォーの自然に由来する曲線的な様式に対する反動を一つの原動力として生まれ、直線的で幾何学的な形態を特徴とします。当館の所蔵するアール・デコの作品としてはルネ・ラリックの《コキーク文オパールセントガラス皿》が挙げられますが、この作品では二枚貝の形を、円とシンプルな曲線へと単純化しています。蝶番にあたる部分の乳白色のガラスは、タイトルにもある「オパールセントガラス」といって、透明なガラスにリン酸塩やフッ素、コバルト等を混入することによって生成されています。光の当たり具合によって青白く、もしくはオレンジに輝いて見える、不思議な効果を持つガラスです。本作品は量産品ではありますが、ガラスの透明性と、意匠のシンプルさが相まって、非常に洗練された印象を与えるものとなっています。



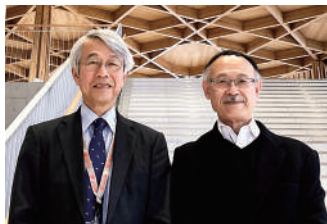
(図3) ルネ・ラリック
《コキーク文オパールセントガラス皿》
1924年、ガラス

ちなみにアール・デコという言葉は、1925年にパリで開催された「現代産業装飾芸術国際博覧会 (L'Exposition internationale des arts décoratifs et industriels modernes)」から取られました。今年ちょうどその開催から100年。惜しくもゴッホ展開催時には周年ではなくなっていますが、展示室で当時の芸術に思いをはせてみてください。

白鞘南海（愛知県美術館）

はじまりから見えること (後編)

～豊田市博物館 村田眞宏館長 へのインタビューから～



村田館長と友の会小林元会長

『空中回廊』58号では、愛知県美術館友の会が発足するまでの背景や、目指していた会の在り方をうかがいました。自主自立的な活動を始めるまでの経緯を伺っていると、我々友の会がこれからどのように進んでいくのがよいのか、方向性が見えてきます。後編では、「自主的」とはどういうことか、また村田館長の「友の会は大切だ」という思いの根底にあるもの、豊田市博物館で進められている「パートナー」の活動についてお話をうかがいました。

自主自立的な活動を確保するために

美術館と相互の協力関係を築き自主自立的な活動を続けるためのヒントをいただけますか？

友の会が自主的な活動をするということと共に、美術館を支えていただく組織であるという思いがあり、それを具体化して実行していただいたことがありました。

会員の皆さんの入館料を無料にすることとも運動しますが、友の会が美術館の強力な応援団であることを示すのは作品を寄贈していただくことだと考え、実施したこともあります。友の会の予算と美術館の収集方針を調整し、作家にも理解をいただいて森岡完介さん、吉岡弘明さん、磯見輝夫さんの版画作品を3年間にわたって寄贈していただきました。

今後の活動についても、皆さんでアイデアを出し合って、これというものがあったら実際に取り組んでみたらいいのではないかと思います。新

しいことをしようとすると、マイナスのことが気になります。ただそういうことを言い出すとできない。どんなことでも必ずマイナス面はあるけれど、得られることが大きいのであればやればよいと思っています。友の会から美術館に新しい活動の形を提案されてみてはいかがでしょうか。

空中回廊14号



強烈な体験

「友の会は大切」「特別な存在」と口にしてくださるのは何故でしょう

平成7(1995)年に阪神淡路大震災が発生した時、文化財レスキュー(文化庁の呼びかけによる被災文化財等救援事業)が初めて実施され、愛知県美術館からも、木本文平さん(現・碧南市藤井達吉現代美術館館長)や私がそれに参加しました。

私が実際に参加したのは、栄根寺(兵庫県川西市)での、兵庫県指定文化財の平安時代の薬師如来坐像などの仏像の救出でした。この仏像が安置されていた薬師堂は江戸時代に建立され、すでに300年くらい経っていました。その薬師堂が地震によって大きく傾いたため、つかえ棒で

支えられていました。被災したお堂から
仏像を救出するという活動の初日は、
報道の人たちも来ていて、文化財レス
キューとしては目立った活動でした。お
堂の中のものの運び出しは一日で終
了し、翌日には傾いたお堂は、未指定
の文化財だったということもあって取り
壊されることになっていました。取り壊
しはお堂にワイヤーロープをかけて引
き倒すというずいぶん荒っぽい方法で
した。お堂が倒された瞬間、物凄い音がし埃が
舞いあがりました。すごくショッキングな出来事
で、この時のことは今でも鮮明に覚えています。
現在なら壊さずに修復したのですが、当時の
判断としては経費面のことなどもあって取り壊し
撤去という方法が選択されたのでしょう。

なぜ300年も伝えられてきたお堂を救えなかった
のか、その後、私なりにあれこれと考えました。
震災当時の栄根寺には檀家さんがいなかった。
ご住職も別の寺との兼務。お堂を守られている
方が時折お世話をする、という状態だったのだ
です。そして文化財の指定も受けていなかった。つ
まりこの薬師堂を守り支える基盤があまりにも脆
弱だったのです。

ちょうどその頃は美術館がどんどんとできてい



引き倒された直後の栄根寺、薬師堂

る時代でした。ある時、私のなかであの薬師堂が
いま各地にできている美術館とどこか重なるよう
に見えてきたのです。美術館も、もし仮に設置者
である自治体や法人が「運営をやめる」と考えた
ときに、来館していただく市民の方たちの理解や
支えがない状態だったら、簡単になくなってしま
うのではないかと。その時「なくすなんてありえない」
とどれだけの方が声を上げていただけるのだらう
かと。美術館と一緒に、館を拠点に活動してくだ
さる友の会のみなさんは、譬えていうならお寺に
とっての檀家のようなものだと思ったわけです。
友の会の皆さんは、自主的な活動をしながらも、
美術館とともに活動していただく最大の理解者で
あり、かけがえのない支持者であると。その思い
はずっと変わっていません。

とよはくパートナー

豊田市博物館のホームページには「みんなで作る博物館」コーナーがありますね

豊田市博物館の運営コンセプトは「みんなで作
りつづける博物館」です。このような博物館への
思いは、愛知県美術館での活動と阪神淡路大震
災での強烈的な体験などがもとになっています。昨
日よりは今日、今日よりは明日、豊田市博物館
が地域社会と市民にとって大切なもの、なくて

はいけないものになっていければと思っています。

とよはくパートナー
「環境維持グループ」
のトラップ調査



とよはくパートナー <https://hakubutsukan.city.toyota.aichi.jp/partner>
館長あいさつ <https://hakubutsukan.city.toyota.aichi.jp/about/greeting>



2025年度 美術館の新しいお仲間

新副館長紹介

ながや みつえ

長屋光枝

- Mitsue Nagaya -



4月1日より、副館長兼企画業務課長として勤務しております長屋光枝と申します。愛知県のお隣の岐阜県出身です。大学時代は名古屋に通学し、愛知県美術館で博物館実習を受けまし

た。専門は、カンディンスキーを中心としたドイツ近現代美術ですが、東京の国立新美術館に就職してからは、19、20世紀のヨーロッパの美術や国内外の現代美術など、さまざまな展覧会を担当してきました。愛知県美術館は幅広いコレクションで知られますが、ドイツ語圏の優れた美術作品を収蔵している国内屈指の美術館でもあります。この恵まれた環境にいることは大きな喜びである一方、初心にかえり、身の引き締まる思いです。東京では長く仕事や家事、育児に追われていましたが、パンデミックで自宅にいる時間が増えたのをきっかけに、俳句を始めました。名古屋でも、ささやかな日常や自然への気づきを大切にしながら、美術をめぐる公的な活動に貢献していきたいと思いを。

新学芸員紹介

いのうえ ひかる

井上ひかる

- Hikaru Inoue -

4月から愛知県美術館で勤務しております、井上ひかるです。修士課程を修了直後、当館に就職しました。大阪に生まれ育ち、大学もギリギリ大阪市内のキャンパスに通っていたので、この春人生ではじめて関西から出てきました。初のひとり暮らしで毎日自炊を頑張っているところです。以前からコマダと手羽先は大好きでしたので、本場に来られて嬉しい限りです。手羽先のおすすめのお店があったら教えていただけますと幸いです。

大学院では近代大阪を代表する日本画家の北野恒富について研究し、恒富と同時代の関西の画家たちについても勉強していました。当館の



コレクションには近代の美術作品だけでなく考古資料まであることを知り、幅の広さに驚かされています。まずはコレクションの勉強に励みながら、愛知ゆかりの作家も大切にしつつ、精一杯学んでいきたいと思いを。これからよろしくお願ひいたします。

入江波光 (1887-1948)

《南欧小景》

大正12(1923)年 絹本着色 36.0×41.0cm 愛知県美術館蔵

京都に生まれた波光は、京都市立美術工芸学校で学んだ後、明治42(1909)年の京都市立絵画専門学校(絵専)の設立とともに入学します。同期生には土田麦僊や小野竹喬、村上華岳、榊原紫峰らがいました。波光は研究科修了後、同校の嘱託として東京美術学校などで古画の模写に携わっていました。大正7(1918)年には国画創作協会(国展)の結成にあたり華岳らから誘いを受け、文展などでの実績がないことを理由に、一旦は辞退しますが、第一回国画創作協会展に一般公募として出品した作で受賞し、翌年会員として迎えられるました。

国展の作家たちは、伝統的な日本絵画の技法を学ぶだけでなく、各々西洋や中国の絵画を受容して制作に取り組んでいました。既存の価値観に捕らわれることなく新たな日本画を創造することを目指した彼らにとって、日本画の中に西洋絵画の表現をいかに取り込んで画業を展開させるかは大きな課題だったのです。

波光は絵専で美術史家の中井宗太郎から東西の美術史を体系的に学んでおり、後期印象派のみならず、イタリア中世絵画にも早くから関心を抱きました。模写に精通していた波光は既に日本で漆喰壁に描かれた仏画の技法を習得していましたが、素材や技法だけでなく、西欧諸国の歴史や風土、文化を含めて理解し咀嚼して自身の制作に活かすためには、やはり本物の作品を見る必要がありました。

大正11(1922)年4月から翌年2月にかけて、波光は京都府と絵専から欧州視察に派遣されることになり、パリを拠点にロンドンやベルリン、そして



入江波光《南欧小景》大正12(1923)年

イタリア各地を巡遊しました。スクロヴェーニ礼拝堂をはじめとする数々の教会のフレスコ画を模写し、ウフィツィ美術館やポンペイ遺跡などを見学、スケッチをしています。特にイタリア初期ルネサンスを代表する画家のピエロ・デッラ・フランチェスカ(1412-1492)に傾倒し、滞欧中に制作した《湖岸》(京都国立近代美術館蔵)はフランチェスカの《ウルビーノ公夫妻像》(ウフィツィ美術館蔵)の裏面に描かれている勝利の寓話の場面を基にしていると考えられます。

当館所蔵の《南欧小景》に描かれているのは、頭に水甕を載せた女性と一本の低木。帰国後の波光はこのような水を汲む女性を題材とした作品を多く描いていますが、本作はその最初期の作であり、わずかな要素による簡潔な構成としています。波光のいう南欧とはイタリアを指し、背景の赤茶けた地塗りに空の青みを帯びさせる淡く霞んだような色彩は、微妙な絵肌を持つ古代ローマ時代の壁画を思わせます。渡欧の成果として得たこの色彩表現は、その後の波光作品における大気に満ちた幻想的な画面へと展開していきました。



学芸員の横顔

井上ひかる

- Hikaru Inoue -
愛知県美術館学芸員

2017年に西日本限定販売になった明治のカール。帰省時は必ず「うすあじ」を買って帰ります。カールが買える最東端は甲南PAで、段ボール箱買いもできるようです。





AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

友の会 新会長から

今年6月の総会の通り、今年度は、現友の会31年の歴史を締めくくる年となりました。

日本の美術館の数は、高度経済成長後の社会的な気運の高まりによって、公立・私立とも、ここ数十年で大きく増加し、現在では世界トップクラスになりました。愛知県美術館の黎明期、まだ、百貨店が展覧会などの多くを担っていた頃、一つ一つ運営のしくみを築き上げていくには、沢山の苦労があっただろうと想像されます。友の会の先輩方も、時に梯子に登って電球を替え、収蔵庫の保護部材を縫ったり、木村定三コレクションの受け入れ作業を支援され、今日があると理解しています。美術館という器は、人々が作品に向き合って、感じて、考えて、何か新しいことに気付くための、成熟した社会にとっても大切な社会インフラだと思えます。美術館の独法移行が軌道に乗った後、新たな会員制度の検討が始まると思えますが、一つの時代が終わっても、愛知県美術館を愛する人々の新たな良い形が模索されていくだろうと、美術館の方々とのお話しから感じています。

なお、現理事会では、2026年3月末までに財産（現金、備品、情報）を処分する様に検討を進めており、2026年2月28日予定の解散総会で、会員の皆様にお諮りいたします。

（愛知県美術館友の会 会長 田中寛）

編 集 後 記

私が初めて編集後記を執筆したのは2013年。あいちトリエンナーレ2013「揺れる大地」に思いを馳せました。数多くの思い出を刻んできた友の会は、国際芸術祭あいち2025が開催された今年度、長い歴史に幕を閉じようとしています。

- 編集 松下智子
喜田泉／小林克敏／田中寛／逸見仁
- 協力 愛知県美術館
- 発行 2025年11月

Art Direction : Masaru Nakada, Design & Layout : Hitoshi Hemmi, Katsutoshi Kobayashi

定例活動

2025年4月～2025年11月

所蔵品管理 (読み下し)	モニター	発送	受付 <small>〔講座〕</small>	広報	ホームページ	理事会
0回 (0回)	3回	4回	11回	0回	随時更新	6回

友の会活動紹介

2025年4月～2025年11月

- 4月 ・特別鑑賞会
「どうぶつ百景展」
岩間美佳 学芸員 
- 6月 ・2025年度総会
・記念講演会 平瀬礼太 愛知県美術館館長
・美術館さんぽメナード美術館「西洋美術コレクション」展
- 7月 ・特別鑑賞会
「竹内栖鳳展」
中野悠 学芸員 
- 8月 ・友の会講座「高松塚古墳壁画～人物群像の構成美を語る～」
来村多加史氏
- 9月 ・友の会講座
「映像アートの源流を探る」
越後谷卓司氏 
- 10月 ・特別鑑賞会
国際芸術祭「あいち2025」
副田一穂 プロジェクトマネージャー
・国際芸術祭さんぽ「瀬戸のまちなか」 
- 11月 ・友の会講座
長屋光枝 愛知県美術館副館長兼企画業務課長
・懇親日帰りバスツアー 兵庫県立美術館

友の会これからの活動予定

2026年1月 特別鑑賞会「ゴッホ展」

これからの展覧会のご案内

ゴッホ展

家族が見つないだ画家の夢

2026年1/3～3/23

愛知県美術館友の会

〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13-2
愛知県美術館内（愛知芸術文化センター 11階）

✉ info@apmoa-tomo.com

ホームページへのアクセスはこちらから

愛知県美術館友の会

検索

apmoa-tomo.com

tel. 052-971-5511 (代)

fax. 052-971-5617

(火・木 11:00～15:00)

✉ [@apmoafriends](https://www.instagram.com/apmoafriends)

